

保育者養成課程における植物栽培活動の教育的意義とその効果について

一科目の連続性に着目して一

○塚越 亜希子(関東短期大学¹⁾) 大澤 力(東京家政大学大学院)

1. はじめに

幼児期における自然体験の重要性については幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において記されているところであり、幼児期に育みたい資質・能力の一つとして「自然との関わり・生命尊重」が掲げられている。

また、子どもの豊かな自然体験を実現するためには、保育者自らが感性を豊かに保つこと、自然と触れ合える環境を保育者が意図的に保育に取り入れていくことなど、保育者の自然に対する姿勢が大きく影響することも明記されている。しかし一方で、若い世代の自然体験不足が指摘されており、保育者養成校においても自然に対して興味関心すら示さない学生が少なくないのが現状である。

そのような状況の中、保育者養成課程において自然体験活動を取り入れることは学生の自然に対する意識づけや自然観、生命観の育成に効果があることが先行研究により明らかになっている。しかし、その場限りの体験で終わり、一つの授業での学びがその先の学びに繋がらず、自らの保育実践に応用することができないこと等が課題にもなっている。

さらに、環境教育の視点においても発達段階に応じた自然体験活動の充実は必要不可欠であり、幼児期の体験は小学校以降で扱う環境教育の基盤となるものであるとされている。次期学習指導要領では環境教育についてより重要視していることから、豊かな感性をもち、自然体験活動を通して環境教育を実践できる保育者の養成は喫緊の課題である。

2. 研究の目的

保育者養成課程における2科目(幼児教育領域科目と小学校教科目)で植物栽培に取り組む学生の自然に対する意識や関心の変化を捉えることにより、植物栽培活動の教育的意義と科目の連続性がもたらす効果について検証することを目的とする。

3. 研究の方法

短期大学保育者養成課程の1年生89名を対象とし、前期(4月から7月)「保育内容・環境」(必修科目)及び後期(10月から1月)「生活」(選択科目)の授業内で植物栽培を行い、学生の自然に対する意識や関心の変化を質問紙調査、栽培記録、授業に対するリアクションペーパーの記述等を通して捉えていく。

また、科目の連続性に着目し、植物栽培活動が前期「保育内容・環境」だけで終わった学生と、後期「生活」を履修し継続的に植物栽培活動に取り組んだ学生との比較でその違いを捉える。

4. 結果と考察

前期「保育内容・環境」の授業では89名全員が2017年の5月から7月にかけて一人一鉢の植物栽培活動を行った。栽培活動前の4月に行った質問紙調

査(89名中86名回答)で「自然に関心がない」と答えた学生は44名と過半数を超えていたが、栽培活動後の8月の調査(89名中82名回答)では7名と大幅に減少した。

また、質問紙の自由記述欄や栽培記録、リアクションペーパーには自らの体験を通して感じた子どもたちに経験させたいことや理想の保育・保育者像に関する記述が植物の生長と共に多く見られるようになった。中には植物の世話を怠り、途中で枯らしてしまった学生もいたが、その体験を通して自らが感じた思いから、保育者として子どもと植物栽培活動をする時にはどのようにしたらよいのかを考えるような記述も見られ、自分にとってはマイナスとも思える経験からも保育者として必要な気づきを学生なりにしていることが伺えた。

さらに、後期の選択科目である「生活」を受講した学生は89名中13名であった。「生活」の授業では「保育内容・環境」での学びを継続させる形で植物栽培を行い、継続的に栽培活動に取り組んだ学生(13名)と継続しなかった学生(76名)とを比較し、自然に対する意識に変化が現れるかを質問紙により調査した。

その結果、前期の栽培活動後の調査で「自然に関心がない」と答えた学生は7名(うち1名:栽培活動継続、6名:非継続)であったのが、後期授業途中(12月下旬)に再度同じ調査を行ったところ(89名中82名回答。うち栽培活動継続12名・非継続70名)栽培活動を継続している学生に関しては1名→1名と変化がなかったものの、非継続の学生は6名→29名と、前期に一度高まった自然への関心が半年も経ずに低下したことが明らかになった。

保育者養成課程における植物栽培活動はこれまでの先行研究で明らかになっているように、学生の自然に対する意識にプラスの変化をもたらすだけでなく、自らの体験を通して子どもたちに経験させたいことに気が付き、子ども達への保育者としての思いや実感を伴った保育者像、保育観を育む効果があることが学生の記述等を通して示唆された。

また、科目の連続性を意識した授業展開は学生の学びの継続へと繋がり、一つの学びの中で培われた意識や関心を低下させることなく維持し続ける効果があることが分かった。領域横断的に、また幼小の接続を意識しながら保育を考えていく力の育成が求められる保育者養成において、このような学びの繋がりは非常に重要なものであると考える。

今後は、科目の連続性という観点から教科横断的な視点について考え、保育者を目指す学生の学びの繋がりを保証する保育者養成課程の在り方についての考察を深めていきたい。

児童学児童教育学専攻 塚越亜希子
日本保育学会第71回大会 宮城学院女子大学(仙台市)

H30.5.12～H30.5.13

注1 東京家政大学大学院生
人間生活学総合研究科修士課程